

マス・コミュニケーション研究の基本的視角 ：社会的コミュニケーションの対立過程論を 中心として

SATO, Takeshi / サトウ, タケシ / 佐藤, 毅

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

211

(終了ページ / End Page)

235

(発行年 / Year)

1962-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017572>

マス・コミュニケーション研究の基本的視角

— 社会的コミュニケーションの対立過程論を中心として —

佐藤 毅

一

近年、アメリカにおけるマス・コミュニケーション研究の分野においてその焦点がマス・メディアそのものからマス・コミュニケーションの社会的過程へと大きく移動してきていることは一つの特徴的な傾向である。⁽¹⁾より正確に言えば、マス・メディアの効果もしくは機能の確定のためにもマス・コミュニケーションの社会的過程の分析が必要であるとの認識が高まってきたものといえる。その背景にはラスウェルらを中心とする初期のマス・コミュニケーション研究で描かれたマス・メディアの原爆的影響力とそれに直接的に対応するマスとしての受動的受け手という、社会的過程論抜きのいわばマス・メディア直接論が修正されていく理論的進行があった。

なかでも、ラザースフェルトとカッツによる「コミュニケーションの二段の流れ」論⁽²⁾はその先駆的な業績であった。これは受け手を取り巻く小集団に注目し、そこにマス・コミュニケーション過程のリレー・ポイントになるオピニオン・リーダーを介在させることで「コミュニケーションの二段の流れ」を位置づけようとする提唱であっ

た。これと併行して、もしくは後に、この理論的線上で現われていったE・フライドソン、ライリー・ライリー、C・W・ライトらによる理論の展開過程を詳述することは避けよう。⁽³⁾

いずれにしても、マス・コミュニケーションの社会的過程に注目し、そこにオピニオンリーダー、小集団、社会構造などの媒介変数を導入することでマス・コミュニケーション内容のリレー・ポイントを見い出すという、いわばマス・メディア機能の間接論であることが共通点である。

このような研究傾向が強まってくると、発想が共通である限り、受け手そのもののコミュニケーション行動をこれらの日常的な社会関係のアミの目のもとで探り、そこにあれこれのコミュニケーション過程の区分を見出そうとする姿勢も生まれてくる。たとえば、「コミュニケーションの三段の流れ」論もそれである。これは受け手の積極的な選択行動の重要性に注目し、「マス・コミュニケーション過程」、「個人間のコミュニケーション過程」に「個人内部のコミュニケーション過程」を加えて、この三つの過程を「社会的」コミュニケーション過程として同一連続線上で捉えることを主張するものである。⁽⁴⁾

われわれは右に見たようにマス・コミュニケーション研究においてその視角がマスコミュニケーション過程を社会的コミュニケーション過程の一環としてあらためて探ろうとする方向へ急速に移動してきたことに大きく関心をもつ。いや、そればかりかある意味では積極的に評価すべきだとも考える。今日では、受け手は社会的行為者として積極的に「準環境」のなかに存在条件についての表象を求めてゆく、コミュニケーション行動の発動者なのだ⁽⁵⁾という敘述も見られているほどである。つまり、あらためて人間としての受け手のコミュニケーション行動にまで視角が設定されはじめていたのである。

しかし、にもかかわらずその視角がコミュニケーション活動の基本的主体としての今日の階級的人間像を捨象し、送り手⇨受け手の図式（いわば送り手中心の発想図式）のなかでコミュニケーション過程を問題にするに留まる限りそこに決定的な疑問を抱かずにはいられない。その限りではせいぜい社会的コミュニケーション過程のなかにマス・コミュニケーション内容の転軸点を多元的に抽出し、その果てに不可知論まがいの相対主義を安住させることに終る危険を感じるからである。それはかつてベルソンがむらっ気たっぷりに下した次のような効果分析の結論が絶えずつきまとう危険といいかえることができる。「ある種の問題に關してのある種のコミュニケーションがある種の条件のもとである種の人々の注意をひいたばあい、ある種の効果が生れる。」⁽⁶⁾われわれはさらにそのような研究の視角が研究者の主観的意図にかかわりなく客観的には支配体制の一環として作用する危険さえ考える。

この小論は右のような疑問に問題意識を胚胎させつつ、その止揚をめざしてマス・コミュニケーション研究の基本的視角を設定しようとする覚え書き風の試みである。そのために歴史の担い手としての人間の本源的活動としての労働から出発して、そこにコミュニケーション活動の本質を探り、歴史的形態としての顕型をつきとめ、さらに現代マス・コミュニケーション活動の基本的形態を明らかにしようとする手続きをとる。そこでは現代社会の一般的階級対立の歴史的現実の故に社会的コミュニケーションの単一過程論を止揚し、いわば社会的コミュニケーションの対立過程論の設定を提唱しようとする。

今日、すではそのような志向をもつ若干の研究が見られているし、⁽⁷⁾またそれにもましてそのような志向への現実的要請は高まっているといつてよい。⁽⁸⁾これに力を得て、曲りなりにも一つの整理づけと若干の提起を試みたいと考えるのである。

(1) すでに一九五六年、C・R・ライトは「マス・コミュニケーションの社会学」C. R. Wright, "Sociology of Mass Communication" in *Sociology in The United States of America*, 1956. H. L. Zetterberg (eds.) pp. 78—83 のなかで一九四五年以降のアメリカでのマス・コミュニケーション研究の諸潮流を整理づけ、その展望を試みたが、そこでフォーマルなマス・メディアとインフォーマル、パーソナル、対面的コミュニケーション・システムとの関係をあつかう研究の将来への進展をほのめかしたのであった。

(2) とくにE・カッツとP・ラザースフェルトによる『個人の影響』(Personal Influence, 1955年) およびE・カッツの『コミュニケーションの二段の流れ』(E. Katz, "Two-Step Flow of Communication" in *Pub. Opin. Quart.*, (Spring 1957).

(3) 拙稿、「マス・コミュニケーションの理論——歴史的展望」『講座現代マス・コミュニケーション』第一巻、河出書房新社、一九六一年、八五—九七頁参照。

(4) 高橋徹「放送理論の系譜(十二回目)——民衆の『価値創造』とメディアの関係」『CBCレポート』一九五九年八月。および「テレビジョンと政治」『思想』一九五八年十一月。さらに「テレビと大衆操作」『講座現代マス・コミュニケーション』第二巻、河出書房新社、一九六〇年参照。

(5) 藤竹暁「テレビ・コミュニケーションの基礎理論(9)」『CBCレポート』一九六二年一月。

(6) B. Berelson, "Communications and Public opinion" in Schramm Wilbur, *Communications in Modern Society*, 1948. P. 172

(7) たとえば、稲葉三千男「マルクス主義のマス・コミュニケーション論」『新聞研究』一九六〇年一月、芝田進午「新聞労働運動論」および「放送における資本と労働」『現代の精神的労働』三一書房、一九六二年。また山本明「商業新聞の基本的矛盾」『人文学』四十六号、一九六〇年二月、山田宗睦『現代認識論』現代思潮社、一九五九年、乾孝『マスコミ時代と芸術』理論社、一九六〇年、さらに山本晴義「マス・コミュニケーションと労働者階級」『今日の哲学』——組織論』三一書房、一九六〇年など。

(8) 一九六〇年のいわゆる安保闘争を契機としてマス・メディア機構の政治的右傾化が進行し、マス・コミュニケーション活動の階級の本質が露骨化してくるなかで、プロレタリアートの立場にたつコミュニケーション活動の形態と方向の究明が

ますます実践的にも要請されてきていることを指す。

二

今日、広くコミュニケーション研究の分野でコミュニケーション過程のモデルを精緻化しようとする作業が一つの大きな関心事となつてきている。マス・コミュニケーション過程を追求するにあたってはまずコミュニケーション過程一般のモデルを設定しそれを手がかりとしてマス・コミュニケーション過程を構築しようとする志向が一般的である。

しかし、今日そのモデルは精緻化されてきているとはいへ、そのモデルの原型もしくは代表型はまず、人間に信号をあたえる機械系のモデルであるシャノン・ウィーバー・モデルであり、さらに機械を操作する人間系内のモデルであるオスグッド・モデルである。⁽²⁾この他には、W・ジョンソンの生理学的モデル、⁽³⁾口頭コミュニケーションに⁽⁴⁾もとづいたブライアント・K・ウオラス・モデルなどがあるが、いずれも右のモデルを源流とするものであるといえる。

W・シュラムの「如何にしてコミュニケーションは作用するか」⁽⁵⁾はそのようなコミュニケーションの諸モデルを手がかりにして個人間コミュニケーション、個人内コミュニケーション受容過程、マス・コミュニケーションの諸過程をモデルとして抽出した代表的な例であった。

ここでそれらを詳述することは避けるが、さしあたりそれらのモデルには次のような特徴点があることに注目しておきたい。すなわち、第一にはそれらのどれもがコミュニケーションとは過程そのものであるとの視点からつく

られていること、第二にどれもがコミュニケーション過程は一方交通ではなく両面交通であるとの考えによっていること、第三に、どれもがメッセージの特性についてふれていないことである⁽⁶⁾。

さらに、興味のあることはコミュニケーション過程の追求の結果として、人間自体が非規則的存在 (non-linear) な存在であり、如何に規制しても、人間の行動様式には自発的な機能変更 (spontaneous variation of function) の効果があらわれてくるという自己認識が生れている点である⁽⁷⁾。このようなばあいにはせいぜい規則的側面 (linear process) だけがさしあたり問題となるだけであり、非規則的と考えられる側面は捨象される。

シユラムはオスグッド・モデルを援用して人間の受容過程に着目した。それはごく簡単に述べると次のようなものである。人間のコミュニケーション受容過程においてメッセージが知覚され、それに対する反応が引き出される過程には三段階がある。すなわち、入ってきたメッセージの符号を解き (decoding) それを解釈し (interpreting) そして再び符号化して (encoding) 反応をもたらす過程である。また、生体内に入ったメッセージは次の三つのレベルに達する可能性をもっている。第一に 'sensory and motor skill level' 第二に 'dispositional level' 第三に 'representational level' である。しかし、これだけでは人間という存在が個体内のコミュニケーション過程に還元されただけのことであり、コミュニケーション過程の本性も、人間そのものの存在も浮び上ってこない。

コミュニケーション過程を追求していった結果、あらためて人間という存在にぶつかり、それをも現象的にコミュニケーション過程としてだけ分解したり、人間を非規則的存在とみて、その規則的側面だけをさしあたり問題としようとする方法は結局、人間不在論であり、それは広く今日支配的なコミュニケーション理論の欠陥であるといえる。それは結果として相対主義の方法におち入る。

われわれは機械系内のコミュニケーション・モデルをそのまま人間⇨人間系内の社会的コミュニケーション・モデルとして援用しようとする方法を見るにつけ、サイバネティックスの提唱者、ノバート・ウィーナーの次の言葉を想起せざるを得ない。

「私の友人のうちのある人々は、この本の中に何か社会への効能をもった新しい考えかたがあるかもしれないと、大きな期待をもっているようである。しかしこれは誤っていると私には思われるのである。私の友人たちは、われわれが社会的環境を理解し、それを制御し得るよりもはるかにまさって、物質的環境を制御し得るようになったことを確信している。したがって差しあたったの課題は、自然科学の方法を人類学・社会学・経済学の方面に拡張することであり、そうすれば社会的な領域でも、同程度の成功を収めることができるであろうと彼らは考えるのである。それが必要であると考えるあまり、彼らはそれが可能であると信じている。これはあまり楽観的にすぎ、また科学の成果の本質の誤解によるものと思う⁽⁸⁾」。

右に見たように、社会的人間間のコミュニケーション過程を機械系内のコミュニケーション過程をモデルとする⁽⁹⁾とでその追求をしていくにしろ、現象的にコミュニケーション過程をもの記述し、整理する視角からは人間のコミュニケーション活動の本質を把握する方向は生れてこない。唯一の正しい方向は人間のコミュニケーション活動をまず歴史的に、論理的にえぐり出すところにある。

G・H・ミードは鋭い洞察力をもって独自のコミュニケーション理論をつくりあげ、周知のように今日のコミュニケーション理論に大きく貢献をした。彼の理論は基本的には否定さるべきものをもつ⁽⁹⁾ではあるが、意味のあるシンボル（共通記号）の成立を發生的——歴史的とはいえないにしても——に追求したが故に、それは身ぶり言語

として、それが協働的、社会的行為のうち(10)にだけ起きるとしている点はともかく、評価さるべきものを持っている。われわれはさしあたり人間のコミュニケーション活動を歴史的・論理的に追求する方法をとる。これはいいかえればマルクス主義の方法に他ならない。

ここでしばしば引用されるエンゲルスのことばをあらためて想いおこそう。

「労働は、すべての人間生活の第一の基本条件であり、しかも、その基本的なことはある意味で、それは人間自身をつくりだした、といわなければならないくらいである。……労働の発達は、相互扶助、共同的な協力のばあいを増加させ、この協力が各個人にとって有用であるとの意識をはっきりさせることによって、必然的に、社会成員を相互に近づけるのに貢献した。要するに、生成しつつある人間は、たがいににか言わなければならないところまで来た。……言語の発達を労働からそして労働をもって説明するのが唯一のただし説明である」(11)

ここでは労働がすべての人間生活の基本条件であり、それが人間自身をつくりだしたこと、さらに労働の発達が人間の言語活動（ひいてはコミュニケーション活動）を成立させていったことが主張されている。

この労働過程そのものが、自己のうちに言語活動をその一契機としてもっている点に関しては、さらに、指摘されるようにあらゆる言葉の起源となる語根が動詞であるという事実や、動詞のうちでも、命令法と直接法がもっとも古いという事情、また、一人称代名詞は二人称代名詞よりも新しく、さらに一人称代名詞のうちでも単数の方が複数よりも新しいとされる事実もこれを裏書きしている。(12)

コミュニケーション活動の主体を労働のなかに求めること、しかも、労働過程の一契機として把握すること、これがひいては広くコミュニケーション研究の基本的視角に他ならない。

このようにコミュニケーション活動を労働過程の一契機として把えることは、コミュニケーション過程そのものへの視角をも新たにさせる。さしあたり、コミュニケーション活動が単なる伝達過程ではなく、他人への——そして同時に自己への——働きかけの作用であることの認識である。

ルビンシュテインの次の言葉に注目しよう。「コミュニケーションの機能——言語の基本的機能は、自らのなかに思想伝達「機能」——相互理解を目的とする思想の伝達、交換——の機能、表現的（表現力に富む）機能および作用的（動機づける）機能を含む。……言語は表現の手段であるとともに作用の手段である。人間が話すのは、直接他のひとびとの行動にたいしてではないとしてもそのひとびとの考えとか感情に、意識に作用を及ぼすためである。……真の語義における言語は、言語の意味的内容にもとづいておこなわれる意識的な作用や伝達の手段である。この点に真の意味の言語、人間の言語の特質がある」⁽¹³⁾。

コミュニケーション活動を基本的には労働過程の一契機として把える限り、一定の目標にむかって相互に前提し、媒介し、相互に発展し合う過程——働きかけの過程を設定することが基本的となるからである。

われわれはこのような弁証法的過程こそ、コミュニケーション過程の基本として確認しなければなるまい。また、そこにみられる弁証法的矛盾こそ、コミュニケーション過程を成立せしめる基本的矛盾であることも。

その過程はもちろん単なる「両面交通」でも、「相互伝達過程」でもない。ここでは相互に役割を交換し、媒介し、しかも、それぞれが内的伝達を伴うことで自己否定の契機をふくむ過程が進行するのである。その結果として相互の認識段階の発展も行なわれる。

「送り手」にとって伝えるということは「受け手」への伝えだけにとどまらず、自分自身への伝えともなる。そ

れは言語についていえば「実践的な意識、他の人間にたいしても存在し、したがって私自身にたいしてもはじめて存在する現実的な意識」⁽¹⁴⁾である。したがって、人間のコミュニケーションには「外的伝達が内的伝達をふくむような特殊の二重構造の伝達が一般的だ」⁽¹⁵⁾といえる。しかも、「送り手」は「受け手」への伝達による自己への内的伝達と自己の認識段階との矛盾的過程のなかで、さらに、「受け手」から伝え返えされる外的伝達と自己の認識段階との矛盾的過程のなかでという二重の関係のもとで自己否定の契機をもち、自己自身を変革させ、より高い認識段階へと進むのであろう。

この段階では「送り手」あるいは「受け手」は実は単なる「送り手」あるいは「受け手」ではない。それは潜在的に物質的生産者であると共に、精神的生産者の姿をとっている。⁽¹⁶⁾本来、人間は、彼らの表象、観念などの生産者⁽¹⁷⁾なのである。

人間のコミュニケーション活動、ひろくいって言語活動はその所産としての言葉を生みだす。その関係は労働過程と労働生産物の関係にあたる。また、労働生産物はたえず労働過程に投ぜられて、労働手段に転化するところから言語活動と言葉の論理的関係は労働過程と労働手段の関係にあたる。そうして、この労働手段としての言葉と規則の全体系である言語に生きた人間の労働過程であるコミュニケーション活動が結合せられて、はじめて労働生産物としてのコミュニケーション内容―表象や観念や思想―がうまれる。

さて、ここでコミュニケーション活動は、それ自体、労働の一モメントであるが、これから分化・自立して労働の生産力を規定しうる点にふれなければならない。実際、たとえば労働組織の一部分で発見された科学的法則は他の部分に伝達されて、労働の技術的過程に応用されたとき生産力を向上させ、それは普遍的生産力の一要因になり

うる⁽¹⁷⁾のである。

ここでスターリンの言語説を思い出して見よう。スターリンはクラシェニンニコワへの答えのなかでマールの言語⁽¹⁸⁾ 生産用具説は否定したが、他方において次のように述べている。

「言語は手段であり用具であって、人々はこれによって、たがいに交通し、思想を交換し、相互の理解にたつのである。……思想の交換は、恒常的で切実な必要事である。なぜならそれなくしては、自然力との闘争にあたり、また必要な物質的財貨を生産するための闘争にあたって、人間の共同行動を調整することは不可能であり、社会の生産活動にあたって成果をあげることは不可能であり、したがって社会的生産の存在そのものも不可能となるからである。……この意味で言語は、交通用具であるとともに、社会の闘争と発展の用具である⁽¹⁹⁾」。

われわれも言語⁽²⁰⁾ 生産用具とは考えないが、しかし、生産用具としても、つまり生産力の一因としてもより積極的に把えるべきだと考える。

かくしてコミュニケーション活動は基本的には労働過程の一契機であり、また生産力の一要因でもあるが、それは社会の歴史的段階に応じて異った形態を示す。まず階級社会の成立とともに、コミュニケーション過程は疎外される。なによりも、ここでは制約された交通——交通の私有制がうまれる。この点でマルクス⁽²⁰⁾ エンゲルスの次の有名な言葉は示唆的である。

「支配階級の思想はどの時代にも支配的な思想である。すなわち、社会の支配的な物質的な力であるところの階級は、どうじにその社会の支配的な精神的な力である。物質的生産の手段を左右する階級は、それとどうじに精神的生産の手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産の手段を欠いているひとびとの思想は、おおむねこの階

級に服従していることになる。支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。したがって、まさしくその一つの階級を支配階級にするところの諸関係の観念的な表現、すなわちこの階級の支配の思想にほかならない。支配階級をかたちづくる諸個人は、とくにまた意識をももち、それゆえに思考する。したがってかれらが階級として支配し、そして歴史の一時代の全範囲を規定するかぎり、かれらがこのことを力のおよぶかぎりおこなうということ、それゆえとくにまた思考する者、思想の生産者としても支配し、かれらの時代の思想の生産と分配を統制するということ、したがってかれらの思想が時代の支配的な思想であるということは、⁽²¹⁾いうまでもない。

さらに、われわれは商品生産と交換が発達するにつれて、コミュニケーション内容のうち、直接、生産過程に関係しない、いわば市場的な内容が過度に存在するようになることを認識しなければならぬ。現象的にはローエンサールのいう生産の英雄から消費の英雄への成立過程を⁽²³⁾コミュニケーション内容に洞察する作業である。

かくしてわれわれは私有制にもとづくコミュニケーション過程が支配的であること、——コミュニケーションの資本主義的形態——を知るのであるが、同時にブルジョアジーによる私有制の「制約された交通」を廃棄しようとするプロレタリアートの団結と闘争による「全体的個人」としての「個人の交通」への形式をめざすコミュニケーション形態の存在をも知る。

今日の社会的コミュニケーションの過程がブルジョアジーとプロレタリアートとによるこの階級対立の二過程によって進行していることはあらためていうまでもない。

われわれはこの社会的コミュニケーションの対立過程を理論的に受けとめ、いわゆるマス・コミュニケーション

過程を歴史的・論理的に位置づけねばなるまい。

- (1) Claude E. Shannon and Warren Weaver, *The Mathematical Theory of Communication*, Urbana, Illinois: The University of Illinois, 1949
- (2) オスグッドのモデルは次の本を参照。
Wilbur Schramm (Eds), *The Process and Effects of Mass Communication*, Urbana, Illinois: The University of Illinois, 1954, pp. 11—12.
- (3) Wendell Johnson, "The Fateful Process of Mr. A. Talking to Mr. B.," in *How Successful Executives Handle people, Harvard Business Review*, Cambridge, Massachusetts, 1953, P. 50
- (4) Donald C. Bryant and Karl R. Wallace, *Fundamentals of Public Speaking*, New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1947,
- (5) Wilbur Schramm, *opt.*, pp. 3—26.
- (6) 杉山貞夫「人間—機械系における Communication のこと」『社会学部紀要第3号』関西学院大学、一九六一年、一三三頁、参照。
- (7) 同右書、二四頁および二六頁参照。
- (8) Nobert Wiener, *Cybernetics*, 1948. 邦訳『サイバネティクス』岩波書店 一六頁。
- (9) ルビンシュテインはミードの理論について次のように批判している。
「感覚の形成がそれと結びついているところの、これらの諸事件または諸過程の連鎖における主導的な環を、ミードは、脳ではなく、生物体の応答的な行動的反作用である」とみとめている。意識を経験と、とくに、個体の社会的環境と同一視することによって、ミードは、心理を脳から切り離そうと努めている。」
邦訳『存在と意識』上、青木書店、四四頁。
- (10) George H. Mead, *Self & Society*, Chicago, Illinois, The University of Chicago Press, 1934. P. 46.
- (11) エンゲルス『自然弁証法』二〇三頁。

- (12) 芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店、一九六一年、九二頁参照。
- (13) ルビンシュティン、邦訳『心理学—原理と歴史—』青木書店、一五七頁。
- (14) マルクスⅡエンゲルス『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫版、三八頁。
- (15) 稲葉三千男「マルクス主義のマス・コミュニケーション論」『新聞研究』一九六〇年一月号、四三頁
- (16) マルクスⅡエンゲルスは次のように書いていることに注目したい。
 「すなわち生産力、社会状態および意識というこれら三つの契機がたがいに矛盾におちいることがあり、また矛盾におちい
 らざるをえないのは分業とともに、精神的活動と物質的活動が—享受と労働が、消費と生産とが別々な個人の仕事になる可
 能性、いな、現実性があたえられているからだということ、そしてそれらが矛盾におちいらずにすむ可能性はただ分業がふ
 たたびやめられることのうちのみ存するということである。」
 マルクスⅡエンゲルス『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫版、四〇頁。
- (17) 同右書、二三頁。
- (18) この点に関しては山本明「商業新聞の基本的矛盾」『人文学』四十六号、一九六〇年、とくに芝田進午、前掲書、九三
 頁を参照。
- (19) スターリン「マルクス主義と言語学の諸問題」『弁証法的唯物論と史的唯物論』国民文庫版、一七七—八頁。
- (20) 同右書、一六一—二頁。
- (21) マルクスⅡエンゲルス、前掲書、六六頁。
- (22) 稲葉三千男、前掲書、六四—七〇頁。
- (23) Les Lowenthal, "Biographies in Popular Magazines," in *American Social Pattern*, W. Petersen (eds.) Doublday
 Anchor Book. 1956. pp. 63—118.

人間のコミュニケーション活動は労働の一契機であると共に、逆に、自立して労働そのものを規定し、生産力の

一要因ともなる。人間はその歴史のなかで、一定のコミュニケーション活動の形態と共に、コミュニケーション内容とその媒体をも歴史的に発展させてきている。

マスコミュニケーションの過程を追求するにあたっては、まずこの媒体の発展を社会の生産諸力との連関のもとにつきとめ、それが社会的コミュニケーション過程で組み込まれる形態が問題とされねばなるまい。いいかえれば、媒体そのものの潜在的な能力とそれの利用のされ方―資本主義的形態が社会的な労働過程のなかで明らかにされること⁽¹⁾がさしあたりの研究課題である。

従来のマス・コミュニケーション理論ではいわゆる「マスコミ」がその魔術的影響力を発揮するのはマス・メディアなのか、その社会的な利用形態なのかはつきり区別する志向が少なかったことは争えない。とくに、いわゆる大衆社会論ではマス・メディアの社会的存在そのものコロラリーとしての利用形態が大写しにされる結果、資本主義的形態の追求が軽視されがちであったといえる。⁽¹⁾この点の議論のあいまいさが「マスコミ」概念の廃棄論や、ブルジョアジャーナリズム概念の再登場論⁽³⁾をも生んだといつてよい。

われわれはまず社会的生産力の一モメントとしての媒体そのものへ注目する。かつて二十世紀の初頭 H・クーリーがアメリカ資本主義がようやく独占段階への突入を始めるという社会のなかで電話、電報、鉄道、映画、大量生産段階の新聞など交通手段の飛躍的發展を目的のまゝにしていち早く、コミュニケーションの意義を指摘したことを想起したい。彼はコミュニケーションを構成する要素としてつぎの四つをあげたのである。⁽⁴⁾第一に表現力、つまりそれが運ぶことのできる思想や感情の範囲、第二に記録の耐久性、つまり時間の克服、第三に速度、つまり空間の克服、第四に伝播力、つまりすべての階級のひとびとへの接近である。

もちろん、今日ではクーリーの時代を遙かに越えたところに媒体が位置する。なによりも媒体は大量伝達能力を飛躍的に増大させている。しかし、彼が現代をコミュニケーションの時代と名づけ、いち早くコミュニケーション媒体の発展に未来の明るい社会像を描いたことは評価されるべきであろう。

コミュニケーション媒体は直接的にはコミュニケーション活動の産物であるとはいえ、それ自体、社会の生産力の発展に応じて生れたものであり、また、逆に社会的生産力そのものも飛躍させる巨大な可能性をもつ。

「以前には口承で伝えられた知識の普及に、印刷術はどのように貢献したか。グーテンベルクからベンジャミン・フランクリンにいたる、印刷工の親方や書物製作者が、われわれの言語習慣をかたちづくる上に、その時代の教授各位よりも、どれだけ多く貢献したか。読みものを商う取引が、印刷術発明後の四世紀に生じた偉大な啓蒙に対し、どれだけ貢献をしたか。それがまた、教皇の権威からキリスト教を解放するばあい、どのように貢献したか。ガリレオやニュートンの時代に、何を贈ったか。人間の尊厳や基本的人権についての人間の考え方に、どういふ触媒の作用を行ったか。知性のあるイギリス人アメリカ人ならば誰でも、これらのことについてくだくだいってもらふ必要を認めないだろう⁽⁵⁾」。

これはホグベンの言葉であるが、活版印刷による媒体の力を見事に表現している。グーテンベルクの印刷機は木版印刷と同様に手動式である限りにおいて、これまでの道具の延長でしかなかった。その量産の規模もホグベンによれば十五世紀では、一版平均三〇〇部前後であったという⁽⁶⁾。しかし、中世の書写技術の生産能力とは比較にならないほど革命的なものである。

現代の機械的媒体―マス・メディアの技術的基礎は一八一四年、ケーニッヒが発明したシリンダー印刷機にお

いて成立する。これこそ最初の動力化された印刷機であり、当時の量産能力は片面印刷で一時間、一、一〇〇枚であったという。⁽⁷⁾

今日テレビで代表される機械的媒体がどれほど、人間の労働者の知的水準を、したがって生産力をたかめる可能性をもっているが当時と比較すればまさにはかり知れないほどのものである。

右に見たようにコミュニケーション媒体に注目したばあい、その発展過程はさしあたり、(一)身体的媒体、(二)道具的媒体、(三)機械的媒体、というように位置づけられよう。⁽⁸⁾

今日では、機械的媒体における技術の進歩は不均等ではあるが文字通り日進月歩の感がある。新聞におけるファクシミリ、漢字テレタイプ、ラジオにおけるFM、テレビにおけるVTR、アイドフォール、工業テレビ、通信衛生テレビ、映画における天然色、立体化などまさに枚挙にいとまがない。

われわれはこのようにコミュニケーションの機械的媒体にマス・メディアに注目するが、そのように注目するが故にその資本主義的な利用形態を問題にせずにはいられない。

マス・コミュニケーション活動は資本主義体制のもとでは、とくに独占資本主義段階のもとでは、媒体およびその内容のもつ社会的な潜勢力が巨大な資本主義的企業の剰余価値追求の手段としてもっぱら「私有的」に「独占的」に利用される。これがマス・メディアの資本主義的所有に利用形態に他ならない。

マスコミ生産物をつくりだす生産過程は価値増殖過程としてあらわれるが、それ故に生産過程における資本と労働の矛盾がマスコミ産業のもとでの基本的矛盾となる。⁽⁹⁾

と同時に、マスコミ生産物はイデオロギー商品として流通過程に入り販売される。マス・コミ生産物は独占資本

の階級的体制的イデオロギーの城壁となるという点で階級的内容をもつが、同時に、それが商品形式をもつ限り、潜在的であれ独占資本と敵対者の位置に立つ最大量の買い手とのコミュニケーション媒体物である。ここでは資本によるイデオロギー支配を貫徹させようとする「一方交通」への運動と労働によるコミュニケーション活動の本質的形態を回復しようとする「全面交通」への運動とが敵対的矛盾として現われる。⁽¹⁰⁾ 経済学的に言えば商品としてのマスコミ生産物をめぐる使用価値と交換価値の矛盾である。このように流通過程における矛盾は一般的階級対立を基礎とする矛盾と関連し、社会的コミュニケーション過程における基本的矛盾である。

かくて、マス・メディアをめぐってマスコミ産業にとっての基本的矛盾である産業内での労資の矛盾（社会的コミュニケーション活動にとつては特殊矛盾）と社会的コミュニケーション活動にとつての基本的矛盾である一般的階級対立（マスコミ産業にとつては特殊矛盾）との二重の矛盾関係が現われる。しかも、両者は有機的関連性をもつてマス・コミュニケーション過程の資本主義的形態を構成しているといえる。

今日、社会的コミュニケーション過程において一般的には階級対立による矛盾、特殊的にはマスコミ産業内における労資の矛盾は日まじに激化しているが、⁽¹¹⁾ その止揚の方向は右のように矛盾関係を把握することで実践的に位置づけられねばならないであろう。⁽¹²⁾

とくに、ラジオ・テレビのマス・メディアは全く資本主義的形態のもとにあるとはいえ、新聞、週刊紙誌および視聴覚媒体などによるマス・メディア・コミュニケーションの民主主義的利用形態が現実的日程にのぼっている⁽¹³⁾と、社会的コミュニケーション過程の本質的形態とその中でのマス・コミュニケーション過程の位置づけは重要な緊急の課題である。

一般に階級社会の成立とともに、社会的コミュニケーションの疎外形態—コミュニケーションの私有制—が始まるが、同時に、その支配的な私有制を打破しようとする反体制の社会的コミュニケーション活動の胎動が開始される。現代資本主義体制のもとでは、それは一般的な階級対立の現実を反映してブルジョアジーによる体制的コミュニケーション活動に対立するプロレタリアートの反帝反独占反体制的コミュニケーション活動という社会的コミュニケーションの対立過程の形をとって現われる⁽¹⁴⁾。しかも、その形態は多様である。さしあたり体制的コミュニケーションは行政組織、職域・地域組織、マス・コミュニケーション・ネットワーク、保守的政治組織などのなかで支配的に機能し、反体制的コミュニケーションは労働組合組織、革新的政治組織などのなかで大きく活動する⁽¹⁵⁾。もちろん、支配階級の思想はいずれの時代においても支配的な思想であるという意味において体制的コミュニケーション機能の優位を認めなければならない。

しかし、ここで両者のコミュニケーション活動の本質的形態を問題にしなければならない。まず反体制的コミュニケーションは基本的にはそれぞれのコミュニケーション主体が「送り手」もしくは「受け手」という社会的、組織的位置にもかかわらず、真に生産を行ない、自己否定の契機をとまなう「相互伝達過程」を行なうなかで客観的現実への認識を深めていく活動体であることがあげられる。これに対して体制的コミュニケーションはこの活動に對抗して、生産から離れた姿勢のもとで自己肯定の「一方交通過程」のなかで資本主義的幻想を生産もしくは分配する活動体であることが特徴的である⁽¹⁶⁾。今日、体制的コミュニケーションが最新の機械的媒体を駆使して、政治的次元では自由、民主主義、アカなどのシンボル、経済的次元では「消費者は王様」などのキャッチ・フレーズを巧妙に用いることで「大衆操作」にやっきとなっていることは周知のところである。しかし、労働過程のなか

で客観的認識の深化に向かう反体制的コミュニケーションは階級闘争のなかで体制的コミュニケーションの幻想性を次第に打ち砕いていく。このなかでマスコミュニケーションの資本主義的形態も有機的に関連をもち、その内部矛盾を激化させつつ、やがてその止揚の方向へと向う。とりわけ、このときマスコミ産業労働者と一般的産業地域労働者との統一戦線による階級闘争は大きな役割を果すのである。

このように社会的コミュニケーションを対立過程として扱ったとき、「二段階の流れ」論に代表される社会的コミュニケーション単一過程論や、マス・コミュニケーション過程のなかでのみ「送り手」、「受け手」を設定する思考方法それ自身、疎外された自己認識にもとづくものといえよう。

マス・コミュニケーション過程、広くいって、コミュニケーション過程において「送り手」と「受け手」のカテゴリーを設定するかぎり、「送り手」と「受け手」は必然的に空間的、時間的に離れた存在であり、「受け手」はもっぱら「受動的」位置においてコミュニケーション内容をせいぜい選択的に受けとめるだけである。⁽¹⁴⁾ たしかに、「受け手」は受動の選択において、受動への抵抗において能動的となるだけである。

しかし、「受け手」を潜在的であれ、反体制的コミュニケーション活動者として、資本主義的マス・コミュニケーション形態に対立する精神的・肉体的労働者として把える限り、「受け手」は必ずしも受動者ではない。⁽¹⁸⁾ とくに、反体制的コミュニケーション活動が活潑化するとき、たとえその「受け手」の位置にあっても、彼は歴史の担い手として能動者に転化する。

しかも、今日、社会主義体制の優位という国際関係の進展のなかで、大工業段階での機械的媒体のアクチュアリテを伝達する潜勢力——それはしばしば畸形的であるが——を評価しなければならない。とりわけ、テレビは大量

伝達の媒体であると共に、時間と空間を超えて現実を再現する能力をもち、客観認識の大きなモメントになりうる。かつてマルクス・レーニンゲルスは共産主義を「交通形態自身の生産」と規定した。そして共産主義がすべての従来
の運動と区別されるのは、「すべていままでの生産関係ならびに交通関係の基礎を变革し、すべての自然成長的
提をはじめて自意識的にいままでの人間の創造物としてとりあつかい、それらの前提の自然成長的性質をはぎと
つて、結合した個人の力にそれらを屈服させる」ことにあるとのべた。⁽¹⁸⁾

今日、すでに中国では新聞の三大作風——(一)、理論と実際のつながり、(二)、大衆とのつながり、(三)紙上で公開的
に自己批判と相互批判——が現実化され、新聞は大衆のもとに奉仕する形態がとられてきている。たとえば、上海
解放日報のばあい、工場、学校、機関、農村など各方面にわたる一万人の通信員を上海にもっているし、国際、国
内の重要ニュースは、新華社のほか労、農、兵士、さらに作家、大学教授、専門家など寄稿家の記事を中心にして
おり、その割合は八〇%（社内二〇%）ほどになるといわれる。⁽²⁰⁾

われわれは少なくともそのような民主集中制のコミュニケーション形態を未来に描くことができるし、また、今
日のテレビより遙かに革命的な機械的媒体を仲介として民主集中制のもとでの主体的で自由なコミュニケーション
活動を現実的に予想することもできる。それは反体制的コミュニケーション活動のなかで部分的に、社会的コミュ
ニケーションの対立過程の止揚の成果として全面的に実現されることになる。

× ×

この小論ははじめにも述べたように現段階におけるマス・コミュニケーション研究の基本的視角の設定のために
いわば社会的コミュニケーションの対立過程論を手がかりにしようとする覚え書きにすぎない。したがって、ごく

大まかな見取図にともなう欠陥も当然予想される。しかし、今はこの小論を手がかりとして続いての特殊研究の課題のなかでそれを克服してゆきたいと考えている。

(1) いわゆる大衆社会論では一般的である。むしろ、商品生産にともなう資本主義的疎外に、くわうるに、マス・メディアというテクノロジーの発展そのものが疎外—大衆社会的疎外—をうみだすとみる。マス・コミュニケーションによる疎外を最も強調した一人はミルスといえる。しかし、マス・コミュニケーションの資本主義的形態こそ基本的に問わるべきであると考ええる。

C. Wright Mills, *The Power Elite*, 1956. pp. 298—324 参照。

(2) マスコミ—マス・コミュニケーションというように日本語として社会的に使用されていないでその意味内容も混乱して用いられていることを中心に最近「マスコミ」概念廃棄論が提唱されている。加藤秀俊「マスコミのなかのマスコミ」『中央公論』一九六〇年一月号、一六五—一九八頁、田中慎次郎『……である』についての会話』『思想』一九六〇年十一月号、一五五—一六〇頁など。

(3) 牧瀬恒二は「マス・コミュニケーション」という用語自身が階級性をぬきにしたことばかり、そのかわりにブルジョアジャーナリズムという明確に階級的主体を規定する用語を使うことをすすめている。それが階級性ぬきであることはわかるとしても、ジャーナリズムという用語でおきかえることには賛成できない。マス・コミュニケーションという用語は本来、マス・メディアという機械的媒体—歴史的産物—に着目して生れた概念である。したがって、階級的主体を明らかにするためにブルジョア・マスコミという用語の方がさしあたり正確だと考える。

牧瀬恒二『新聞の論理』三一新書、一九六〇年、二一五—六頁参照。

(4) Charles H. Cooley; “The Significance of Communication (1909)” in *Reader in Public Opinion and Communication*, Berelson and Jonovitz (ed.) 1950. p. 147.

(5) L. Hogben, *From Cave Painting to Comic Strip*, 1949 邦訳『コミュニケーションの歴史』岩波現代叢書、一一八—一九頁。

(6) 同書、一二六頁。

起ち上がった時には、新聞もその圏外ではありえない。……闘争を新聞社の中に限定すれば困難は重なり、目先は真つ暗にさえなる。私たち新聞工作者は、人民の闘争と結びつかなくてはならない。……解放区の新聞記者は解放区の人民のエネルギーの上に立って闘いに参加し、反動支配下にある新聞記者も、人民の闘争の中に入って闘いました。この二つの闘いが、一九四九年、ついに一緒になって反動を追い払ったのです。」日本ジャーナリスト会議他共同編集『中国新聞代表団訪日の記録』一九六一年、四六一―七頁。

(13) 新週刊の発行、高速輪転機による「アカハタ」の印刷開始、8ミリ映画、テープレコーダーなどによる視聴覚媒体の革新陣営内の多様な利用、さらに無数にのぼる組合機関紙認の配布などによる反体制コミュニケーション活動を指す。

(14) このような社会的コミュニケーションの対立過程論の提唱は、稲葉三千男「新安保体制下の言論操作と反体制勢力」『思想』一九六一年三月、一〇一頁、松下圭一「現代政治過程におけるマス・コミュニケーション」『講座現代マス・コミュニケーション』I、河出書房、一九六一年にも見られる。松下のばあい、体制コミュニケーションと国民コミュニケーションという二つのカテゴリーを設定している。

(15) 稲葉三千男は前掲書で現存制度としては(1)マスコミ (2)行政組織 (3)保守組織 (4)革新組織の「四筋」のネットワークを考えている。

(16) ミルスがアメリカにおける保守的ムードの支配をパワー・エリートとの権力維持との関連で実に鋭くとらえていることはこの点で注目してS.S. C. W. Mills, *The Power Elite*, 1956 pp, 325—342参照。

(17) 山田宗睦は「精神的生産が精神的交通によって規整される構造、ないしは、コミュニケーションの規整によって現代思想をとこうとする方策は、すべて、支配階級の思想分配に、くみするものである。」とのべて、「支配階級のイデオロギー分配に対抗して、思想構造をかえるには、送り手受け手とははんたいの、精神的生産者とイデオロギー分配者のカテゴリー——で、思想経営を分析しなくてはならない。」と提唱する。

山田宗睦『現代認識論』現代思潮社、一九五九年、二七二―二七四頁。

(18) ここでコミュニケーション活動者というのはコミュニケーション活動それ自体を専門とする人々のことではない。労働過程そのものの発展のためにコミュニケーション活動を行なう人々―労働者をさす。

グラムシの次の言葉は労働者の能動的姿勢を見事に表現している。

「資本家の歴史的発展路線は腐敗の過程、分解の過程である。……資本所有者の階級は労働と生産から遠ざかり、分解し、その初期の統一の意識を失なってしまっている。……産業の管理は、無資格な、無責任な輩の手中に落ちた。いまや労働者階級だけが労働を愛するもの、機械を愛するものである。労働者階級が生産を支配しており、それゆえに社会の主人である。」

邦訳『グラムシ選集』Ⅰ、合同出版社、一九六一年、二五―二八頁。

(19) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』前掲書、一〇八頁。

(20) 前掲、『中国新聞代表訪日の記録』三〇―三一頁。